東方時空鬼行 ~The Romance of Hurt Vimpire~

加積久住

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方時空鬼行 ~ Ｔｈｅ Ｒｏｍａｎｃｅ ｏｆ Ｈｕｒｔ Ｖｉｍｐｉｒｅ~

【Ｎコード】
Ｎ９１５２Ｚ

【作者名】
加積久住

【あらすじ】
ある日の夜、紅魔館に一人の来訪者がやってきた。彼は外来人。しかし、人ではなかった。――――欠損を抱えた鬼、それも吸血鬼でした。けれど、吸血鬼と呼ぶには、あまりにも足りなく、あまりにもらしくない。――――これは『嘘真を体現する程度の能力』と『道を切り開く程度の能力』をもった男の話。

第1符：紅魔への来訪（前書き）

この小説は「東方ｐｒｏｊｅｃｔの二次創作の試作品」です。
いまだに創作性が拙いですが、どうぞご容赦くださいませ。

それでは、どうぞ。

第1符：紅魔への来訪

その日は、喉が渇く夜だった。
加えて、肌に張り付くようなピリピリとした空気が、心を逆なでするような錯覚を与えていた。
従者が用意した紅茶に混入された血の味。
夜空に浮かぶ満月が放つ魔力。
いつもよりも過敏に反応する感覚は、虫の知らせなのか。

そして、それはやってきた。

他人ならざる者。
しかし、それは違和感を覚える存在だった。
あるはずのものがないような、しかし、それ無いことで命に関わると言うわけではない。
だが、その欠損は存在の体現、その種族ならば、あるべきものだと言える。
魔法使いなのに魔法の知識がないような。それでいて、魔力だけは他を圧倒する膨大さを誇っているような。
やってくる気配は、そんな不格好な存在だった。

なぜ、そこまで詳細が分かったか。
それは彼女の能力にも一部関係があるが、大半は察知した気配に覚えがあっただけだった。

もし、彼女の予想通りの存在がやってくるのであれば、それは混ざり物か否かだろう。

「――――――如何致しますか」

私有地の手前までその気配がやってきた丁度その時、我が自慢の従者が背後に現れていた。
気配を感じさせぬ登場。
時間と空間を操る少女。空間については時間の因果からの応用だが。

間もなくして、この館の正門の方角より戦闘音が轟いた。

「この気配、ちょっと興味があるわ」
「では、連れて参りましょう」
「いえ、ちょっと待ちなさい」

彼女は、命令の受諾と共に退室しようとしていた従者を止めた。
従者は半身をひるがえし、彼女の二の句を待つ。

そして、彼女、紅魔館が主レミリア・スカーレットは、笑って告げた。

「迎撃しなさい」

結果を楽しみにしているかのように、日曜日に玩具を買って貰った幼子のような純粋さにも見え、それでいて愉悦に染まった小悪魔のようでもあった。

■□■□■

燃える情景を、血に染まった惨状を。

赤一色。赤く、紅い。
血を求めてか。それとも生き続けた結果周囲が染まっていたのか。
血と関連性のある鬼。
紅い血を啜る鬼が住まう館、紅魔館。
鬼と血。
吸血鬼。
他人ならざる者、妖怪や怪異と呼ばれる存在。その中でも上位に相当する能力を保持し、誇り、振るう化け物。

「私はこの館の門番。此処から先は行き止まりです。疾くと引き返しなさい」

緑色の軍服帽と同色のチャイナ服に包まれた女性紅美鈴。緋色の長髪と露出する引き締まった肢体が目を引くずば抜けてすたいるの良い女性だった。
紅魔館お抱えの優秀な門番でもある。
が、その実態は格闘術のみに特化した居眠り常習犯である。これでもかというほど居眠りを続け、その度にメイド長の串刺し刑を受けるちょっぴり学習能力がない子でもあった。

「再度警告します。これより先は主の許可なく立ち入ることは禁止されています。これを反故した場合、私は迎撃し、場合によっては殺害も余儀なくされます」

そう告げて、美鈴は臨戦体制を取った。

しかし、戦闘は始まらない。

相対する来訪者は、変わらず紅魔館を見ているだけだった。
濃紺のダッフルコートを羽織り、手はそのポケットの中に。その

下は背広らしく、スーツのズボンがコートの裾から見えていた。
夜風に遊ばせた銀髪が月の光を受けてさらさらと煌めき、わずかな沈黙の後、来訪者は問うた。

「此処は吸血鬼の城だと、聞き及んでいたのだけれど？」
「……知っていてやって、き、たの、ですか……」
「回答には肯定を。なるほど。私の勘は間違っていなかったらしい。――――ん？　どうした？　鳩が豆鉄砲を喰らったかのような顔をして。私の何かが君を驚かせるほどおかしかったかな？」

そういって、来訪者は自身の身なりを気にし出す。
靡く銀髪。その隙間から覗いた双眸に、美鈴は何故か言葉を詰まらせた。
異彩色の瞳。
オッドアイ。
黄金と真紅。
自分でも何故、驚いているのかわからない。
そもそも自分奈驚いたのだろうか。
あの目を見た途端、身を正さなければならないような気がしてしまった。
敬い、支え、付き従う。
それが当たり前のような錯覚を覚えてしまった。

「何用ですか、そして貴方は何者なんですか」

美鈴は緩んでしまった拳を再度握り直し、構え、気を練り上げた。
何もかもが知れない。
美鈴は、異質な来訪者を単に迎撃すべき相手ではなく、警戒すべき人外として自身の認識内で格上げをする。

もともと異質な気を感じていたことで、相手が人間ではないことを知っていた。
だが、自分が臨戦態勢を取ったにもかかわらず、それを解きかけてしまうほどの「魅了」を覚えてしまう。そんな相手を警戒しないわけにはいかなかった。

自分の役割は、この館の門番。
何人も主の許しなしに立ち入ることを禁じる役目。

故に、後退はあり得ないし、敵の進行も許されない。

「少し待ちたまえ。私は戦闘はあまり好きではない。君の問いにもまだ答えていないしね」
「なら、答えてくれると？」
「いいとも。君の疑念を晴らしてあげよう」

来訪者は、静かにかみしめるような笑みを浮かべて、答える。
美鈴から見た来訪者は、まだ若い。人間ならば、１０代か２０代前半程度の若さだが、その纏う雰囲気はまったくと言っていいほど掴めなかった。
飄々とした、何処か浮世離れした存在。
まるで水面に浮かぶ月のように、時々認識がずれてしまう。
かと思えば、其処にいるのが当然のような存在感を覚えてしまう。

「私の目的、それは単なる面会。この館の吸血鬼、君の主を見てみたいという好奇心のみだ。血を吸う鬼。人を魅了する怪異。鬼の力と天狗の速さ兼ね備えた上位種。そして、面白い事に此処の吸血鬼は“運命操作”の能力者と“破壊”の能力者の二人だと。ならば、そんな脅威に脅威を重ねるような、鬼に金棒な存在を見てみたいと思わないかな？」

来訪者は片手を支えに肘をつき、そのついた手を上げに当てて、ほくそ笑む。
その姿は様になっており、まるで作成した脚本が予想以上のモノとなり、決して期待を裏切らない物を見ているかのような、そんな達観した表情をしていた。

「けれど、此処を通ることに変わりはない。お嬢様型が出向くことなどあり得ません。だから――――――倒します」

そう告げるや否や美鈴は駆け出した。
近接格闘術――中国拳法を得意とした彼女は、この世界幻想郷の戦闘ルール「弾幕ごっこ」よりもこちらが本領を発揮できる。
故に、武術技法の縮地法にて一瞬に間合いを詰め、一気に片を付けようという作戦も何もない戦法。
それに間違いはない。
得体のしれない相手故に、自分との力量の差が知れないだけに、長引けばそれだけ不利になることは、長年の経験から知っている。
加えて、美鈴の戦闘スタイルは接近戦。
間合いを詰めなければ、話にならないのだ。

「あ、そうそう。君のもう一つの問いにも答えて上げなくてはね」

開始の合図もなしに始まった戦闘。
しかし、それに慌てる様子もなく、来訪者は飄々と言った。
美鈴は接近し、彼の前で踏込む。

「私が何者か。そうだね、――――≪翼を?がれた鳥≫とでも考えて

くれればいいよ」

そして、少女の掌底が放たれた。

第1符：紅魔への来訪（後書き）

如何だったでしょうか。
もし、気に留めていただけたのであれば、次話へとどうぞ。

それでは、悪しからず。

第2符：瀟洒な従者と大図書館の魔女（前書き）

二話目です。
タイトル通りの人たちが登場しますよー？
口調とかはわかりませんので、テキトーですよ？

第2符：瀟洒な従者と大図書館の魔女

「ふむ。お出迎え有り難うございます。しかし、少々熱烈すぎるのが、目に余りますね――――あ、これをお返しましょう」

そう言って、来訪者から侵入者へとクラスチェンジした者は、正面ホールで出会った少女に持っている者を投げ渡した。

それは銀の奇跡を残して、少女の足元へと突き刺さる。

「全く、あの子は居眠りばかりで、ちゃんと仕事をしないんだから」

文句を垂れながら、少女は自分が投げつけたナイフを拾う。

メイド服に身を包んだまだ若い女。

十六夜咲夜。紅魔館の仕事を一点に引き受けるメイド長である。

完全で瀟洒な従者。

彼女は呆れ調で、今は閉ざされた扉に目を向けた。いつも居眠りしてばかりの無能門番だが、巫女や白黒魔法使いとこうも簡単に人を無許可で通されてはたまったものではない。

今度しっかりとお灸をすえなければね。

「いやいや、彼女はしっかりと責務を果たそうとしていたよ。ただ、彼女の戦闘スタイルは私とかみ合わなかったというだけだよ。後でご褒美でもあげるといいよ」

咲夜が同罰を与えたらいいものかと思案していると、侵入者は何でもないようにそう告げた。

「他人の心配をするなんておかしな人ね」

笑みを浮かべた咲夜だったが、その目は笑っておらず、その口元を隠した左の内と後ろに回された右手には、すでに次の一手のために、ナイフが隠されていた。

「そもそも思い違いをしているわね」
「はて？　私は何か勘違いをしていたかな？」
「ええ。熱烈な歓迎なんてされるわけないじゃない。この不法侵入者さん？」
「なるほど。一理ある回答。しかし、あまり面白みがない回答でもあったかな。どうだい、その辺思う所はないかな？　無くてもいいんだけれどね、人間は考える葦であるというじゃないか。それはそうと、君は誰かな？　見たところメイドさんみたいだけれど？　それはそうと私はこの館の吸血鬼に用があるんだけど、どうだだろう？　案内してはくれまいか」

侵入者は、まるで歌うように次から次へと言葉の紡ぎ出していく。
それに対して、咲夜は、

「危ないですね」
「それくらい、避けれるくせに」

まるでちょっとしたじゃれ合いのような会話。
しかし、実際はナイフを投擲し、それを両手の指で挟み受け止めたという実態。合計四本のナイフを右と左に二本ずつ。咲夜に至っては次のナイフをすでに用意して構えていた。

「ちょっと世間話したいだけなのだがね」
「私は主からあなたを撃退するよう仰せつかっているのよ」

やれやれと肩をすくめた侵入者。
それを冷めた様子で無視し、あるモノを取り出した従者。

≪幻符「殺人ドール」≫

彼女がそう唱えた瞬間、彼の目の前にはナイフの舞踏乱舞が描かれていた。

■□■□■

ところ変わって、此処は地下の大図書館。
壁一面と空間を圧倒する本棚の数々。
そのジャンルも数知れず。魔導書をはじめ、世界に知れた物語、一般的教養、趣味、エトセトラ、エトセトラ。とにかくこの世の本という本が集ったかのような大図書館であり、そこは二人の少女によって管理されていた。

「パチェリー様ー、どうやら侵入者は門を抜けたようですね」
「そうみたいね。あ、こあ、其処の本、片付けておいてね」
「了解ですー」

積み上げた本の塔ともいえるものに囲まれて、図書館の管理者パチェリー・ノーレッジは、自分の使え魔である小悪魔に読み終えた本を指さして指示する。
一日中本を読みあさり、本の管理もさながら、その読書量も多い

ため、一向に図書館にある書籍の把握は追いつかない。それが現状であり、研究をするパチェリーと整理をし続ける小悪魔は、ほとんど外出というものをしたことがない。

「大したことなさそうね」

その言葉は、今取り掛かっている研究に対する感想ではない。

別のモノ、別の誰かに向いていた。

いわゆるヒッキーである彼女にとって、紅魔館の住人以外はとても珍しいものであった。

珍しいが故に、自分の領域（テリトリー）に侵入した気配には敏感。

振り返ると、其処に一つの影。

図書館の扉の前から真っ直ぐに此処へ向かってくる。

銀髪に赤眼金眼の男。

此処に来るまでに戦闘がなかったわけがないのに、その身には傷一つついていない。そして、飄々と幽霊じみた浮遊した雰囲気が、無視してもいいが、いったん気になったならば、なんか無視できないという気になってしまう。

自分の知るこの館の従者を此処に来る前に相手しているはず。

しかし、その外見を再確認してみるが、やはり裾のほつれ一つなかった。

「美鈴と咲夜はどうしたのかしら？」

相手が素直に答えてくれるはずなどないだろうけれど、少しは心配だったために尋ねた。

彼女の考えは杞憂に終わるのか、男は少し口元を引き上げて答えた。

「少しばかり妨害工作をされるもので、致し方なく退場してもらい

ました。あ、大丈夫ですよ。本当にただ眠ってもらっているだけです。殺してなんかいませんよ？」

男は本気で慌てた様に手を突き出して振った。

その様子は故意にそうしているようにも見え、少しだけいらっとした。

「あの子たちを殺しでもすれば、この館の主が黙ってないわ」

「ほう。吸血鬼でありながら従者思いとは、これまた珍しい要素があったものですね。私ならば人間などそんな風には見れないですが、貴女はどうですか？　人間、お好きですか？」

「あなたに答える義理はないと思うのだけれど？」

「如何にも」

男は、それはそうかと少しばかり肩を落とした。

けれど、少女は、ただと続け、

「私の知る人間に嫌いな奴はいないわ」

次の瞬間、大図書館の上空に五つの魔法陣が浮かび上がっていた。

赤、青、黄、緑、茶と五色の魔法陣。それぞれに異なる種類の魔法。

「異なる系統の同時展開。なるほど、魔法使いの家系であるだけはあるという事ですね。ノーレッジさん、お名前（ファーストネーム）をお伺いしても？」

「……ぱ、っ――――――私に勝ってみればわかるかもね！」

男は、なるほどなるほどと頷いてみせる。

だが、少女は魔法の第一陣を発射していた。

火球、氷柱、落雷、暴風、岩石。五つの力が一人の男に向かっていった。
男の身には、一見したところ武器らしきものを所持している様子はない。
まあ、この幻想郷で武器を持っている者などほとんどいないが。いたとしても、巫女のあれとか死神の鎌とかあとは傘を持った奴とかだ。
そう考えてみると、この幻想郷には銃火機器の類は見かけないなと、少女は第二陣の発射用意を進めつつ、単純な感想を抱いた。

「貴女、持病がありますね？」

魔法によって舞い上がった煙幕の中から、声が聞こえた。
それは魔女である彼女の心を鷲掴みにするような内容で、第二陣を発射することを忘れて、彼の次の声を待ってしまった。

「それでは、そろそろ本題に。この館の主は何処ですか？」

次に聞こえたのは、彼女のすぐ背後からだった。
腕を組み、嗤い掛けて問う男。
しかし、その存在感はただ尋ねているようなものではなかった。
圧迫するような空気。
漏れ出す魔力。
存在を明確に。相手の脳に焼き付けるかのような、情報を割り込

ませられているかのような感覚。それに先ほど名を聞かれて、素直に言ってしまいそうになった。
それはもう、友人の■■■に名をあらためていうかのような。
パチェリーはその感覚もあって、別の違和感を覚えた。
何だろうか。
言葉にするならば、既視感。この感覚は覚えがある、この気配には覚えがあると。
そう考えた時、ある予想が浮かんだ。

「貴方、もしかして吸血――――――ッ！？　ゴホッ、ウォッゴホッ、はぁ……ぅ、ゴホッ！？」

少女が問い終わる前に、彼女は運悪く持病を再発させてしまう。
男は目を細めて笑みを浮かべるだけだった。

第2符：瀟洒な従者と大図書館の魔女（後書き）

どうでしょう？
各キャラの話し方がいまいちつかめないのですがね。
なんかやっていくうちにみんな同じ感じになると思いますよ。
戦闘シーンを詳細に描くのはしばらくないかも。

あ、今から言うのもアレですけれど、わたしは東方をクリアしたことがございませんので。

それでは、次回をお楽しみに。
悪しからず。

第3符：吸血鬼と吸血鬼だった妖怪（前書き）

今回は少し短めです。
感想お待ちしてますよー？

第3符：吸血鬼と吸血鬼だった妖怪

彼女が自室で控えていると、それはついにやってきた。

「おかしいわね。私は迎え撃てと言ったと思ったのだけれど。パチェ、どういうわけかしら？」

少女は自室にやってきた者達へと視線をぶつけて言った。

対して、入室してきた少女――魔女は、あくまでも平時の様子と変わらない様子だった。

変わらず、その胸に本を抱え、けだるそうな半目で、けれど、図書館から出てくるという事に限っては、普段の彼女からはあまり考えられないことだった。

そして、魔女が引き連れていた者もまたそうだった。

いつもの使え魔である小悪魔ではなく――――――

「『迎撃しろ』と、確かにそう咲夜には言われたわね。けれど、何となくこうなるとわかっていたのでしょう？　あんたの能力はそういうものだものね。けれど、その様子からして、確率的にはこの状況はそんなに高くはなかったみたいね」

いつになく彼女にしては饒舌だった。

喘息持ちで、きつい運動も難しい彼女は、話すことも億劫だと言っていたにもかかわらず。

気味が悪くなるほど喋る魔女は、続けて言葉を吐く。

「美鈴も咲夜もやられて、そして私がこいつを連れてくることを知

っていた。アンタが何のためにこいつを排除しようとしたのか知らないけれど、少なくともあんたが能力で見た運命を変えるために、私達に迎撃命令を出した。違う？　勿論、結果だけではなく、その間の所々詳細に見えていたのかもしれないけれど、運命を操ることがどういうことか私にはわからないし、今はそれよりも面白い物を見つけたから、その詳細を調べるのは今度にするわ」

魔女は何が面白いのか、笑みを浮かべる。

それによって、少女はこらえる事が出来なくなってしまった。

何故と。

「どうしたのかしら、パチェリー・ノーレッジ。いつになく口が開くじゃないの。喘息で苦しいって言ってたのにね。それに、面白い物って、まさかと思うけれど、その男かしら？」

「ふふっ。そうかもね。彼については少しばかり興味深い物があるわね」

目を伏せて笑みを浮かべ続ける魔女。

しかし、少女は不機嫌だった。

それは間違いない。

訳の分からない侵入者がやって来て、門番と従者が迎撃に出たが、返り討ち。そして、友人である魔女は何故か侵入者たる男の肩を持つような発言をしている。

これが不機嫌にならないわけがない。

加えて、少女が見た運命はこういうものではなかった。

「私がみた運命は、確かに詳細ものではなかったわ。せいぜい、誰がいて、どうなったか。主流人物と結果しか見えなかったわ。その運命というのが、『一匹の妖怪が紅魔館にやって来て、パチェリー・

ノーレッジがその妖怪の前で倒れている』というものだった。其処に私が手を加えて、『咲夜に捕えられる』というものに変えた」
「けれど、結果は『パチェリー・ノーレッジが一匹の妖怪を引き連れて、紅魔館の主レミリア・スカーレットの前に現れた』というものになった」
「言葉にすればそういう状況ね。で、説明話あるのかしら？　この館の主に許可なく侵入者に縄もくれずに引き連れて、それはもう何か言い訳の一つでもなければ、私も考えざるを得なくなるわ」
「簡単な話よ。彼が能力持ちで、あんたの『運命を操る程度の能力』に対応できてしまっただけのことよ」
「へぇー。その能力っていうのは何かしらね」
「それは彼に直接聞いたらどうかしら？　彼はそれを教えないほど小さな男ではないみたいだしね？」

それまで魔女の背後に控え、一言も発しなかった人物。
彼の背に手を回し、少女の前に押し出した。
少しの間、少女と男の視線がぶつかり、沈黙となる。

「それで、何なの？」

少女が問いかける。
しかし、男はその問いに答えず、別の事実を口にしてしまうのだった。

「貴女がこの館の主か。見た目通りの御人のようだね。ノーレッジ、君の友人は随分と可愛らしい少女だ」

「なっ」

「あらあら」

三者三様の反応というか。
少女は、彼の言葉を理解した途端顔を真っ赤に染め上げ、
魔女は、そんな少女の反応を見て、親心の様な心境で笑みを浮かべていた。

「貴様、私を侮辱する気か？　ならば、相応の覚悟があるのだろうな」

少女は、その身の本能を剥き出すように爪を立て、睨みを利かす。
鋭い瞳孔が赤い輝きを持ち、表情にも険しさが表れ、威圧感を放っている。

「ノーレッジ、彼女は何に怒りを覚えているのだろう」
「大丈夫よ、ノイン。あの子は、褒められ慣れていないだけだから」

自分の発現が要因だという事に気付かない男。
別段おかしなことはないという魔女。
未だに怒りと恥ずかしさを持つ吸血鬼。

「ほら、レミリア。いい加減落ち着きなさいよ。彼が自己紹介するわ」
「むー、良いわ。後でじっくり話をさせてもらうから」

魔女の宥めに、気を落ち着かせ、少女と男は再び対面。

「ノイマン・キャロリゼッタ。本日はこの地に能力持ちの吸血鬼が

存在すると聞き及び、参上した。貴女の能力の名は知れた。その詳細を教えてもらえないかな？」

■■■■■

きっと今日は楽しい日になる。

そんな予感がしていた。

わたしはいつも一人。

時々？玩具？が持ってこられるけれど、そのどれもが弱くて、小さくて、つまらない。

けれど、今日来るんじゃないかと思ったものは、きっと面白い。

ベッドで目が覚めた時からそんな気がしていた。

何か面白いことがないかと。

外ではどんな楽しいことが起こっているのかと。

わたしはいつまでここにいればいいのかと。

そんなことばかり思っていた。

これから来るのは、どんな妖怪なのだろう。また、妖精かもしれない。

もしかしたら、あの白黒や紅白のように人間なのかもしれない。

それ以外のものかもしれない。

何にしても、きっと強い存在だ。
自分が本気で戦っても、簡単には壊れないくらい頑丈で、強靭な生き物。

「ふむ。お姉さんとはまた違った愛らしさのある子ですね」

予感がして、たぶん半日くらいたった頃だと思う。
やってきた気配は、男ものだった。
見知らぬということは当然だったのだが、なぜか懐かしさを感じる。
そして、気づく。

「……似てる」

「敢えてこう聞いてみましょう。誰とですか？」

扉の前で立っているその人は、入ってきたままの笑顔でそう聞いてきた。
似ているからだと思うけれど、私はその人に対して大した警戒心もたずに世間話をするかのように、さらっと答える。

「結構会ってないから絶対って言えないけど、きっとあなたの感じはお姉さまに似てるわ」

そういうと、その人は、ほうと興味深そうな顔をした。

「ごめんなさい。お姉さまに似てるっていったけれど、なんか胡散臭さを感じたわ」

「私はあの人のような怪しさはないはずなのだが、まあいいでしょう」

その人は私の前までやってくると、一礼した。

洗礼されたその動作は一昔の貴族の気品を思い出させる。

「我が名はノイマン・キャロリゼッタと申します。お嬢さん、お名前をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

まっすぐにこちらを見る男性。

その眼は異なる色の目をしていて、一つは私やお姉さまと同じ赤い色だった。

その色が単なる赤い色ではなく、やっぱり似ている、同じかもしれないという思いを抱かせた。

「初めまして。フランドール・スカーレット。吸血鬼の妹ですわ」

久々のあいさつ。

わたしは相手の礼儀正しさにならって、スカートをつまんで片足を引いて、一礼した。

第3符：吸血鬼と吸血鬼だった妖怪（後書き）

――――次回予定――――――

ついに名を明かしたノイマン・キャロリゼッタ。
彼は何者で、どんな能力の持ち主か。
その秘密がついに解き放たれる！？

と、言った話になる？予定？です。

感想お待ちしてますよ？
では、悪しからず。

第４符：狂乱舞踏会（前書き）

正直、弾幕ごっこの描写とかあまり気にしないでほしいです。
何となく、こんな風。
戦闘描写もあまり得意ではないので、ご容赦のほどお願いしますよー？

あと、今回は戦闘のほかにもう一つ場面を加えての切り替え方式にしました。
混乱させてしまったら、ごめんなさい。

第４符：狂乱舞踏会

「ねえ、パチェ」
「何かしら？」
「あの男、本当に何者なのかしらね」
「あら、ノインが直接教えてくれたじゃない」
確かにあの男は渋る様子もなく、自分の能力を開示した。

■■■■■

「私の能力は、『道を切り開く程度の能力』です」

「なるほど。それで私が変えた運命を、困難な未来を切り開いたってことね」
「はい。変えられた運命というものは実に奇妙な感覚でした」
「運命の感覚なんてものが分かるものなの？」
「ええ。まさにアバウトなものでしかありませんけれど」

客室に三人の存在。
一人は館の主であり、吸血鬼の少女。
一人はその友人にして大図書館の管理者たる魔女。
そして、侵入者にして今回の騒動の原因たる男。

少女たちは、ノイマン・キャロリゼッタを交えて、対談していた。

「ノイン。それって具体的に言うとどんなものなのかしら？」
「そうだな。『道を開く』という行為自体、形容しにくい。敢えて言葉にするのであれば、？泥の中を息苦しくも進む？というのが一番近い。そして、『変えられた運命で道を開く』という感覚は、さながら？糸に絡みに行く？ような感じだろう。変えられたということは、それだけ弄られたという事。ならば、自然とその？道？が絡まることのまた必然だろう」
「何か痛みとかはあるの？」
「滅多なことでは痛みはない。感覚に限った圧迫のみだ」
「なら、これまでに痛みを感じることはあったのかしら？」

魔女としては、知的好奇心に過ぎなかっただろう。
研究熱心な彼女からすれば、それは当然な行為なのだろうけれど。

それに対して、男はなんでもないように答えた。

しかし、それがいわゆるフラグを立てる行為であったことを少女たちは知らない。

「絶対的危機、それこそ？死？からの生還でもない限り実際の痛みはないだろう」

■■■■■

そういって、男は客間から出て行った。

「お嬢様」

「あら、気が付いたの？　咲夜」

少女は、ソファーから起き上がると、自分の主に頭を下げる。

「申し訳ございません、お嬢様。言いつけを守れませんでした」

「いいわ。それよりも、病み上がりで悪いけれど、紅茶をお願いできるかしら？」

「わかりました」

そう答えた途端、少女は姿を消した。

まあ、こんなことは日常茶飯事。彼女の能力が故に消えたように見えるだけである。

「それにしても、どうしてアイツを地下へ向かわせたの？」

従者がお茶を用意するまでの間、魔女はふと少女に尋ねた。

「何か気に喰わないことでもあったかしら？」

「別にそういうわけじゃないわ。けれど、前より落ち着いたとはいえ、あの子に誰かを合わせる事は危険すぎる事よ。もし、失敗でもすれば、今度はどんな被害が出るかわからないじゃない」

「その時はその時よ」

■□■□■

「遊ぼう？」

その言葉と共に、目の前に赤と黄色の光球が散りばめられた。

「おやおや、血気盛んな様子で」

ノイマンは楽しそうに笑っていた。

しかし、内心どうしたものかと悩んでもいた。

「一枚目、いくよ」

≪禁忌「クランベリートラップ」≫

少女フランドールが唱えるとともに、ノイマンを四方から囲むように弾幕が張られた。

正直な話、ノイマンは話し合いをまずしようと考えていた。

それというのも、彼は知的好奇心の下に動いている。

自分以外の吸血鬼。

それも能力者。

吸血種というもの自体、外界には存在しない。それは魔女や能力者という部類でも同じだが、やはり稀少価値から言って吸血鬼というものは高い。実際、吸血鬼という存在に出会ったことはこれまでに片手ほどもない。

加えて、この館に訪れてからというもの、その戦法が始めてみるもので戸惑っているというのもある。

見た所、魔力などといった純粋な力を形としたものらしいが、驚くことはいくつかあった。

まず、その操作性。

無数ともいえる光球を一度に出現させ、それを放つ。言ってしまえばそれだけだが、実際右手と左手で違う事をして、目では本を読んでいる以上のことだろう。

まあ、それも才能なのだろう。

それと、能力というものは根源的な者であるだけに、そのものの感情、想像力と強く結びついている事が多い。

外界に溢れる漫画やアニメにはその類の危機的脱出などが加須切れないほどあるが、あながち間違っていないのだ。

そして、次に相手の持つあのカード。

「中々避けるのが上手だね。なら、次はもうちょっとレベルを上げてあげる」

≪禁忌「フォーオブアカインド」≫

≪禁忌「レーヴァテイン」≫

■□■□■

地下から響く地鳴り。

それに揺られて赤い湖畔に波が経つ。
カップの中を覗きこみ、少女は微笑を浮かべる。

「お嬢様？」

ふと、主が笑ったことに従者たる咲夜は何かと尋ねる。
それに対して、何でもないと答えるレミリア。

レミリアははっきり言えば、面白いと思っていた。
先程の地響きは、間違いなく地下からのモノだ。
加えて、気配の増加に伴い力の漏れも感じ取れる。
間違いなく、フランドールが本気で？遊び？に夢中になっている証拠だ。

あの男がどれだけ危機から脱することができる能力が持っていたとしても、あの子を任すことはそうたやすい事ではない。

最近は、紅白巫女や白黒魔法使いが相手してくれたから長年の鬱憤が少しは紛れただろうけれど、それでもやはり地下に籠っている事には変わりないし、時々館内を徘徊してはいるみたいだが、幻想郷の隅から隅まで出歩くのはまだ許せない。
それがやはり懸念事項だったし、妹のことは心配だった。

（これが少しは憂さ晴らしになってくれればいいのだけれどね）

笑みを浮かべつつ、紅茶を口に運んだところで、レミリアは隣を見た。

「パチェ」
「何？」

紅茶に舌鼓するはずのレミリアだったが、隣の椅子に座るパチェリーに気が向いてしまう。
本を開き、それを一見読んでいるように見える彼女だったが、本の上に添えたその手の指は幾度となく、本を叩き、さながら、徐々にテンポの速くなるメトロノームのようでもある。

「どうしたの、パチェリー？　先程から落ち着きがないみたいだけど？」
「そうかしら？　私は至って平常よ。どこもおかしい処なんてないわ」

そう返してはいるけれど、彼女に落ち着きのおの字もないことは、レミリアも咲夜も丸わかりだった。
咲夜が紅茶を出したのも気づかず、本は先ほどから捲られない。
しかし、地下から上がる地響きには敏感で、鳴るたびにきゃまの扉に視線を映していた。

レミリアは少し悪戯心をくすぶられ、
「ねえ、パチェリー。貴女ずいぶんあの男にご執心みたいね？」
パチェリーはその言葉に、一時フリーズし、
「はあ！？　な、なな、あん、っ――――――！！」
顔を真っ赤にして、何かを言おうとしたパチュリーだったが、それをすると却って何かを肯定しているのではと考えた。だから、切れ端のものしか口から出る言葉はなかった。

「パチェ、少し落ち着きなさい。別に私はその事を笑っているわけではないわ。――――理解できないだけで」
「ちょっと待ちなさいよ！　私は何もアイツに気があるとは一言も言ってないでしょう！　勝手に決めつけないでちょうだい」
「そうは言うけれど、ねえ？」

レミリアは激昂するパチェリーから視線を外し、自分たちの脇に控えていた昨夜へと視線を投げかける。
それに気づいた咲夜は、静かに頷き、
「はい。お嬢様の仰られる通り、パチェリー様の様子は明らかに動揺しているものに見えます」

友人とその従者にそう責められた彼女は、もはや何を言うでもなく、この一言しかなかった。
「む、むきゅー……」

■□■□■

「すごいすごいっ！　もっともっと――――だよっ！！」
そう嬉々として叫ぶフランドールは、弾幕を張り直す。
もう眩しいくらいの光球の豪雨。七色の攻撃に、壁を反射するものといくつものパターンの攻撃。
ノイマンは、それらに耐え、今に至る。

「全くもってそこが知れない。君は一体どれほど底が知れないのかな？」

ノイマンがそういうのも無理はない。
彼是数十分は同じペースで攻撃を受けている。
むしろ、これほどの物をよく避けていると自分に言ってやりたい。

「お兄さんこそっ、ずっと逃げてばっかりだけどっ、それだけ弱ってたら、こんなに長く持たない、よっ！！」

弾幕を張りつつも、その中に紛らせて物理攻撃を仕掛けるフランドール。その威力は人間どころか並の妖怪でも畏れをなすもの。
すでに部屋は部屋としての役割を果たせないまでに崩壊していた。
床は抉れ、壁は割れている。そして全体的に弾幕の余波によって穴が無数に開いていた。

「私は逃げたくて逃げてるわけではないよ」
「なら、思いっきり漕ぐ役してもいいんだよ！」
「私はこの土地の戦闘方法を、君たちで言うところの？弾幕ごっこ？というもののやり方を知らないのでね」
「だったら、すきに攻撃してもいいんだよ！　私もルール無くても戦えるものの！」
「そうか。しかし、郷に入っては郷に従えという。リハーサル無しだが、やってみるのも面白いだろう！」

そういうや否や、ノイマンは足を止め、魔力を練り上げる。
考察するに、想像力と魔力のコントロールが重要なのだろう。

力を分散し、個でありながら群であることを意識しながら———

――――

「では、まず第一陣だ」

目の前で腕を振るう。

その軌跡をたどり、紅色の光球がノイマンの前に鏤められる。

そして、爆ぜる。

どれもこれも軌道はバラバラ。

フランドールの下へ届いたのは数十もない。

「駄目だね。全然狙いが定まってないよ！」

「ふむ、では第二陣だ」

次に広がったのは、紅に混じった黄色の光球。

「今度のものは先ほどとは異なるぞ？」

紅色の弾幕は未だに狙いは甘いが、確かに面で攻めていた。

そして、黄色の弾幕は、弾丸としても性能を有してはおらず、直進して尾を引いた。

「へえ、レーザーにしたんだ」

黄色の起点をノイマンの目前に残し、フランドールへと一直線に伸びるレーザー。

しかし、フランドールは移動する。吸血鬼はその速度を天狗と並べる。加えて、彼女は俊敏性が高い上に、小柄であるために、狙い

が定めにくい。

「そろそろつまんないかな！」

弾幕を張れるようになったと言っても、それは彼女に比べれば、素人のソレ。

館前の氷の妖精に比べてもどっこいどっこいか。

ましてや『スペルカード』ももっていないのでは、自分と肩を並べるの到底難しいと断言できる。

フランドールは新たに弾幕を張り直す。

それも厚く広く。逃げ道がないくらいに。

対して、ノイマンはおもむろに両腕を広げた。

その瞬間、彼を周囲に紅と黄の弾幕が広がり、彼を覆い隠すように渦を描いた。

「ならば、これでどうかね？」

光りの渦が晴れ、再び弾幕とレーザーを打ち続け始めたノイマンだったが、フランドールが見た限り何か変わった様子はない。

変わらず、弾幕を撃ち続けている。

はったりか？

何をしたのか、わからない。

実質、相手から力の高まりや新たな力の付与は感じられない。

そして、本能が問題ないと言っている。

ならば、もう迷うことはない。

そうフランドールは決めつけた。

「何をしたのかわかんないけど、――――――これで終わりだよ！！！！」

≪禁断「過去を刻む時計」≫

二つの光球。
其れから延びる十字のレーザー。
それが反時計回りを描いて回る。
加えて、通常の弾幕も広がり、その二種がノイマンに襲い掛かった。

■□■□■

「まあ、パチェが気に入っているのは、いいのだけれど――――――」
「別に、気に行ってなんかっ」
「はいはい。もうその反論はいいから」
呆れと面倒臭さを感じながら、そういうと、魔女は子供のように唇を尖らせ、不機嫌になった。
「まったく、拗ねることないじゃない。それよりもよ」

「・・・・・・なによ」

椅子の背もたれに寄りかかって身を沈める魔女。

それをみて、吸血鬼の少女は、扱いに困るものが増えたなどと感じつつも尋ねた。

「あの男、ノイマン・キャロリゼッタという者は何なの？　貴女はあの男から少なくとも他のものよりは信頼されているみたいだし、そこのところ教えられているんじゃない？」

「あら？　レミィ。あなた気づかなかったの？」

「何が？」

少女の問いに、魔女は不機嫌でいることよりも意外だという思いが上回った。

魔女は少女の問いに答えるのではなく、彼女の背後の従者に目を向ける。

「咲夜、貴女はどう？」

魔女の問いに、従者は少し考える様子を見せたのち、

「お嬢様や妹様、ですか？」

「私とフランが何よ」

魔女はふむふむと頷く。

「美鈴はどうかわからないけど、たぶんフランは気づくでしょう。となると、貴女だけね、レミィ」

「……だから、何がよ」

先ほどと打って変わり、今度は少女の方が不機嫌になる。
なかなか答えがもらえず、イライラしていたのだ。

「ふふっ、意外と鈍感なのかしら？」
「うーっ！　いい加減教えなさーい！」

――――カリスマブレイク？

少女はとうとう我慢できずに、声を上げて抗議し始めた。

「いいこと、レミリア。あいつ、ノイマン・キャロリゼッタは吸血鬼なのよ」

「え？」

「それもとても古い存在。けれど、あなたはきっと思うでしょう。あいつは人間染みている。吸血鬼の誇りらしいものがないと。でも、それは当然なのよ」

魔女は少女をからかっていた時とは一転して、真剣な表情になる。

「あの人は魔女狩りによって、吸血鬼の翼を千切られ、牙を折られたの」

第４符：狂乱舞踏会（後書き）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ノイマン・キャロリゼッタ。

種族：吸血鬼
年齢：魔女狩り前後（１２世紀から１４世紀の生まれ）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

次回は、人物設定が続きです。

細かな設定とか気になった点のご指摘がありましたら、ご感想とともにお願いします。
感想お待ちしてますよー？

それでは悪しからず。

第5符：小休憩（前書き）

今回は短いです。

それでは、どうぞ。

第5符：小休憩

「フラン、翼や牙のない吸血鬼って聞いた事がなかったけど――――」

フランドールは、目の前で散り散りになる黒い影を見つめてそう断言した。

回る十字のレーザー二つといつもより厚く張った弾幕を放った。
そして、爆風が晴れた底には誰もいなくて、やりすぎたと一瞬フランドールは考えたが、すぐにその考えを捨てた。

あの気配はまだ変わらず残っている。
ならば、この部屋のどこかにいるはず。

この幻想郷には相手の資格から逃れる手段を持つ者が何人もいる。

例えば、様々な並を操り、存在の移送をずらす能力を持った玉兎。
例えば、光のベクトルを操る妖精。
例えば、無意識を操る覚りの妹。

他にも、スキマなんてものもあるけれど、この際、それはいい。

そして、よくよく部屋の中を見回してみると、所何処に黒い物があった。

「やっぱり吸血鬼なんだね……」

フランドールがそう口にした時、その黒い物体と目があった。
「御明察。回避の手段が思いつかなかったため、こうせざるを得なかった」
「さっきも言ったけど、翼や牙のない吸血鬼がいるって知らなかった。お兄さん本当に吸血鬼なの？」
部屋のあちこちから集まった黒い物体は、形だけ見れば、それは蝙蝠だった。
しかし、実物のそれではなく、まるで子供が描いたような簡略化したもの、それが辛うじて蝙蝠であろうと認識できる程度の形しかなかった。足もなく、牙もない、爪だってなかったし。黒い折り紙をギザギザに切ったものと言っても過言ではない形をしていた。
「私のことが知りたいか。ならば、早々に決着をつけよう。お遊びを終わりにして、君の姉君を交えて話した方が説明は一回で済む。私は手間はできるだけ省く主義なのだ」
ノイマンは其処で初めて構えを取った。
武器はない。純粋な徒手空拳の構え。
「お兄さん武器無いの？　なら、フランも」
そういって、フランドールは拳を握り、そして開く。
まるで自分の力を確認しているかのような仕草だった。

「ちょっと本気で殴るけど、いいよね？　お兄さんきっとお姉さまやあの人間たちみたいに強いみたいだから」
「良いだろう。君の拳が届くかどうかわからないが、其処に遠慮はいらないよ」

両者笑みを浮かべ、そして、

「さあ、終幕（フィナーレ）だ！」

こうして、純粋な力のぶつけ合いで、狂乱舞踏会は終焉を迎えた。

■□■□■

「どうやら、終わったみたいね」

最後の衝撃から数分達、彼女らは地下室の扉の前にいた。
其処は数メートルの重厚な扉が行く手を塞ぎ、まさに幽閉にはう

ってつけの場所。
けれど、今現在は幽閉という役割はなく、中の住人が此処になんとなく居座っているだけだった。

「……お嬢様」
「どうしたの？」

先に扉を開け、中の様子を探っていた咲夜だったが、何やらその様子がおかしい。
中を覗いたまま、訝しげな表情をして、すぐわきに退き、その隙間にレミリアを促していた。

「これは、……もはや残骸しか残ってないわね……」

其処は元はフランドール・スカーレットの私室だった、そう誰がこの惨状を見て思うだろうか。
壁も床も平面な面は一つとしてない。すべてが抉れ、割れていた。
三人は部屋の中に入り、中を見回す。

しかし、

「二人はどこに行ったのかしら……」

そう。
中には誰もいなかったのだ。
倒れている影もなければ、勝者も敗者もいない。
部屋の中は無人だった。

「どうなったのかしら？」
「此処にいないという事は、部屋を出て行った以外に考えられないじゃない。気配を探れば、フランの居所なんてすぐにわかるわ。フランがいれば、ノインが何処にいるかなんてすぐよ」
それから、三人はどこかと探って言った結果。

客間の扉を開けると、そこには銀髪の人物が長椅子に腰を下ろしている姿がまず目に入った。
「あんたね、勝手にあっちこっち移動しないで――――」
まったくどこに言っていたのかと文句の一つでも言ってやろうかとしたパチェリーだったが、それはすぐに彼によって止められた。
ノイマンは指を口元に立てていた。
「？　何が――――」
何事かと思い、彼によっていくと、彼の脇で寝息を立てるフランドールの姿があったのだ。

■■■■■

レミリアたちがノイマンたちを探して客間にたどりつく数分前。

「此処にいれば、そのうち彼女らもやってくるだろう」

長椅子に腰を下ろし、残った疲労感を吐き出すように呼吸する。

そうしたことで、意外と先程の戦闘が体に響いていたことを感じた。

しかし、それも仕方がない事だろう。

何せ、外の世界ではあれほど激化する戦闘は個人では行わないのだから。

この土地にはあのような戦闘が可能な人間が存在するらしいが、そんなものが外に出れば、瞬時に危険因子として捉えられるか排除されるだろう。

「ふむ、それともこの土地だからできる事なのか」

「何が？」

独り言をいつのまにか零してしまっていたらしく、隣に座っていたフランドールが首をかしげていた。

「いや何この幻想郷という場所には、君に勝てる人間がいるらしいことを思い出してね」

「ああ、霊夢や魔理沙のことね。あの二人はもう普通の人間に分類しちゃだめだと思うのよね」

「まあ、吸血鬼に勝てるほどだからな」

「そういうお兄さんも吸血鬼なんでしょう？　あの二人に勝てる？

私のお姉さまも負けたことあるのよ？」

スカーレット姉妹を負かす人間か。

この少女たちは見かけこそ幼いが、その実力は計り知れない。

姉のレミリアは運命という絶対的なものを味方につけているし、妹のフランドールはすべてを破壊できる力を持っている。基本的スペックでも人間など足元にも及ばないはずだ。それを打ち破る人間。それはいったいどれだけの能力を持っているのか。

ノイマンは少しばかりその二人の人間に興味をそそられた。

「見てわかるとおり、私には翼がない。そして牙がない。吸血鬼としての象徴たるものがこれだけ欠けていることは、大きなハンディーキャップだろう。しかし、簡単には負けてやれないよ。むしろ、私が勝利するかもしれないだろう？」

「そう？　わたしに勝てるから、できるかもしれないけれど、やっぱり無理じゃない？」

「どうだろうな。実際のところ、様々な要素によって勝敗は優劣するだろう。殺し合いではない、相性が不明、そして、私が今どれだけの力を出せるのか、私自身解っていないというものある」

「自分の琴なのにわかんないの？」

フランドールはおかしそうに笑った。

ノイマンも、そうだなと笑い、

「私はまだ君たちの言う？弾幕ごっこ？というものの本質を掴んでいない。君の使ったあのカードのこともだ」

「スペルカードのことね」

「まあ、それも追々知ることにしよう。――――それにしても、一体どこへ行ってしまったのか」

「もしかし、地下に行ったんじゃない？　ほら、私達がさっきまで

いた所」

5分経っても、一稿に背後の扉が開かれることはなく、しまいには二人とも日まで仕方なくなっていたのだ。

「――――ねえ、お兄さんはどうしてそんな風になっちゃったの・・・・・・・・・・・」

またしばらくして、そんな質問がフランドールから飛び出した。

フランドール自身もそのような訊くこと自体感覚的に割ることだとわかってはいた。

しかし、それでも、訊いてしまった。

彼女からすれば、ノイマン・キャロリゼッタという人物は、何かの皮を被ったように感じ取れたのだ。

吸血鬼という気配は感じられるけれど、目で見た時には、それが微妙にずれて感じられる。自分にも、姉にも翼があり、牙があり、目が紅い事が当然だと思っていた。そのどれもが吸血鬼を象徴するもんだから。

けれど、ノイマンは片目は紅いけれど、翼はないし、牙はない。

それが、少しだけ変に感じられた。

「・・・・・・ふむ、私が吸血鬼に見えない、か？」

フランドールの考えを見越して、ノイマンはそう言った。

彼にそう言われた、少女は何も言わず、ただ黙って、俯くばかり。

「やっぱりいいっ！」

「待ちたまえ」

沈黙が続き、気まずい雰囲気に耐えかねたフランドールは、勢いのまま客間を飛び出そうとした。

しかし、それはノイマンによって止められる。

「・・・・・・・・・だって、お兄さん、言いたくないんでしょう・・・・・・？　だから、ずっと黙ってるんだよね？」

「――――辛くない。そういってしまえば、それまでだが、別に聞かれることに抵抗があるというわけではないのだ。しっかりとこの姿になった事に対する心の区切りは付けている。だから、私の姿を問う事に負い目を感じる事はない。むしろ、それで不仲になることが好ましくない」

ノイマンは出ていこうとしたフランドールの手を引き、二人は向かい合うように椅子に座りなおした。

「まあ、このことについては、他の奴らがそろってからと思っていたが、少しだけフランドールに話してもいいだろう」

どこから話したものか、そうボヤキながらノイマンはこんなことを言った。

「さて、その話をする前に、フランドール。吸血鬼にとって人間とはなんだと言えるかな？」
「……前までは弱くて、遊び相手にもならないし、血は飲めるけど、やっぱり他の玩具と変わんないと思ってた」
「今は？」
「……私はまだ何にも知らない。紅白の巫女と白黒の魔法使いしか外の人間を知らない。咲夜も人間だけれど、お姉さまに付きっきりだから、あんまり話したことないし」
「それで？」
「……まだ、これだってはっきりといえない……」

長い間、約５００年弱の時を地下でこもりっきりだった彼女にとって、与えられた一室と定期的に訪れる妖精メイド、そして記憶の中の姉だけが自分の世界だった。
自分は何も知らないのだ。
それを今日改めて知った。
そして、いろんなことを知りたいと思った。
けれど、そう思ってしまったために、目の前の人物の過去を無理に知ろうとしてしまった。それを彼は許してくれたけれど、それはよかったと喜ぶべきか、もしくは何か別の選択肢があったのではないだろうか。

そう思っていると、

「フランドール」

不意に、名前を呼ばれて、フランドールは表を上げる。
そして、思わぬ告白をされるのだった。

「ノイマン・キャロリゼッタという吸血鬼はね、人間に恋をしたのだよ」

第5符：小休憩（後書き）

次回、ノイマンの過去話か……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9152z/

東方時空鬼行 ~The Romance of Hurt Vimpire~

2012年1月9日16時50分発行